

「地人論」と地理学

山 名 伸 作

- I 内村鑑三の地理学への指向
- II 「地人論」の内容
- III 「地人論」と地理学
- IV 結び

I

ここに「地人論」というのは、1894年（明治27年）5月に「地理学考」の書名で刊行され、その後二、三の親友の勧誘に従って「地人論」と改題して1897年（明治30年）2月に再版された内村鑑三の著書のことである。

「地人論」は地理学者のあいだでは知られているが、一般には内村鑑三は地理学者としては扱われていないであろう。むしろ農学士内村の自然科学者である側面は水産学での業績が高く評価されている。内村自身も次のように書いている。「余は一時は熱心に農学の研究に従事した、余は偏に国に富を増進せんと勤めた、水産は殊に余の注意を惹いたものであった、余は日本一の水産学者とならんと欲した、余は信ず日本国に於て水産調査なるものを最初に主張した者は余であった事を、余は日本国は島国であるから其富の過半は之を水より得ねばならぬと思ふた、故に其頃の余の脳中には鯨・鮭・鱒・青魚等鱈の生えたものの外何にもなかった、農商務省で出版した日本魚類目録なるものは余が調整した者である事は今の水産課の人々も承知して呉れるであろうと思ふ。⁽²⁾」また「回想の内村鑑三⁽³⁾」にのっている宇田道隆、羽原又吉、大島正満の諸氏の論究によれば、内村は幼少の頃から山野に遊んで、川魚をとるのを楽しみにするな

(1) 「地人論」の第二版に附する自序、以下本稿では1942年の岩波文庫版を用いることにする。

(2) 「余の従事しつつある社会改良事業」其の五、内村鑑三著作集第1巻p. 360, 1953年

(3) 岩波書店刊1956年

ど天然物を愛し、札幌農学校時代には実用動物学を目指していた。1881年同校を首席で卒業した後直ちに北海道開拓使勸業課に奉職し、同年10月には日本最初の水産調査書である「札幌^{アホビ}県鮑蕃殖調査書」を作成している。翌1882年に上京してからは大日本水産会でたびたび「人気アル講演者」として講演したり、その機関誌である「大日本水産会報告」には第1号に「千歳川鮭魚減少の原因」という論文をのせているし、以来たびたび寄稿している。1883年には農商務省囑託として水産課に勤務し、前述の「日本産魚類目録」を1884年に作り599種の魚類を記載している。当時23才の青年内村鑑三はこうして日本魚学のすぐれた先駆者として登場したのである。その後も鯨魚業の調査に従事したり、渡米してからもアメリカの水産調査所を訪ねたり漁港をおとずれたりしている。さらに帰朝後は1889年3月より1年間、農学士米国理学士内村鑑三は水産伝習所（水産講習所東京水産大学の前身）の動物植学教授を委嘱され1週間4時間づつ実用動物学を講義している。しかしこのように科学者としてすばらしい才能を有していた内村は、「農商務省の役人達に失望し」、「日本の教育界より逐はれ」……「終に余の天職に入る⁽⁴⁾」のである。

ところでここでの主題は以上の水産学者としての側面ではなくて地理学者としての側面である。このことについてやはり内村自身の書いたものをみると、かなり執着をもっていたように思われる。まず「目的⁽⁵⁾の進歩」という短文では、「余は初めに地理学者とならんと欲した、札幌農学校に入りし時の余はそれであった。余は其次ぎに水産学者とならんと欲した、札幌農学校を出し時の余はそれであった。……」と書いており、内村にとっては地理学が最初の希望であったことがわかる。そしてその志の具体化したものとして最初に「地理学考」と題したこの「地人論」について、後年の1919年（大正8年）6月17日の日記に、「『地人論』の訂正に従事した、三十五年前に成りし自分の著述を読んで勤からず教へられる所があった、……今に至って地理学者とならずして

(4) 「余の従事しつつある社会改良事業」

(5) 聖書之研究第158号、1913年 内村鑑三著作集第1巻p. 378

(6) 以下の日記の引用は何れも岩波文庫版の鈴木俊郎氏の解説による。

聖書学者となりし事を悔いざるを得ない、詩人シルレルが言ひし如く『自由は山に在り、腐敗の気は未だ嘗て其新鮮なる氣流を汚せしことなし、あゝ自然は到る所に完全なり、唯々人のみが憂苦を以て之を毀損す』と、然り自由は山に在り、海に在り、……あゝ人よ青年よ、汝等の自由を求めんと欲せば……山と海と地理学とに行けよ。」と書いている。また同年6月19日の日記では「……余は独り清流に面して旧著『地人論』の訂正に従事した、文は拙である、然し乍ら想は雄大である、曰く『亜細亞』、曰く『改羅巴論』、曰く『亜米利加論』と、世界の地理を、一大詩篇として見たる作である、余は此の著述を為して置きし事を感謝する、米国アマストに於ける地歴研究二年間の結果である。」とある。同じく6月2日附では「……箒川の流声を聞きながら終日『地人論』の訂正に従事した、日本天職論最後の結論たる『東西我に於て合す、パミール高原に於て正反対の方向をとりて分離流出せし両文明は太平洋中に於て相会し、二者の配合によりて胚胎せし新文明は我より出でて再び東西両洋に普からんとす』との我言を読み終つて、余は一大思想を世に供せしことを感謝せざるを得なかつた、後世之を読みて我思想を政治的に世界に行ふ者があろう、或はキリストが再び来り給ふかも知れない。」としている。続いて6月21日にも「『地人論』訂正を終つた、随分の骨折りであつた、然し為す甲斐のある努力であつた、其文は拙劣なれども想は雄大である、此著は此儘にして葬らるべき者ではない、訂正を施して再び世に出すべき充分の価値があると認むる、此事を為すために四日間山中に留まりし事を悔いない、尙ほ引き續きて『興国史談』の訂正を此の静かなる所に於て行ひたくある、……」とあり、少しおくれで9月17日付では「『地理学考』（地人論）の校正を了つた、……自分ながら此無邪気なる幼稚の作を愛せざるを得ない」と感想をしるしている。以上のように内村はこの「地人論」についてはその内容を自負しておりまたなみなみならぬ愛着の念をもっていたのである。

II

それでは「地人論」とはどんな内容を有している書物であろうか。すでによ

く知られているのでその必要はないと思うが、一応大要を紹介することにする。

まずその構成は、第一章 地理学研究の目的、第二章 地理学と歴史其一、第三章 地理学と歴史其二、第四章 地理学と摂理、第五章 亜細亜論、第六章 欧羅巴論、第七章 亜米利加論、第八章 東洋論、第九章 日本の地理と其天職、第十章 南三大陸、となっている。以下各章の順序にしたがってみてゆくことにしたい。

第一章の内容は、「地理学の本領は地球表面今日の有様なり」として地理学と地質学・天文学との区別から始まる。地理学はこれらの諸学に比べれば皮相的である。しかしそれだからといって浅薄ではない。いや「地理学は実に諸学の基なり、我等地の事を知らざるにいかで天の事を悟るを得んや」である。そしてまた「我は世界の民(Weltmann)にしてカシュミヤの肩掛を以て寒を防ぎ、露国の麦粉を以て饑饉を癒し、南米の牛皮を以て我が靴を作り、巴里、里昂^{リオン}の職工をして我が絹糸を紡がしめ、北米の石油を燈し、印度の珈琲に快活を求め」るのであるから、「地理なしの殖産は野蛮人の殖産にして」「幾多の小量なる経済論は地理学上の無識より来りし」ものである。「富の増加と快樂の伸張は常に地理的知識の進歩を伴ひ来り」であり、日本の今後について「吾人の渴望する探險は開明国観察的の探險」を考へるべきで、それは「休言米国の市場已に日本品の以て充すべきなしと、北米の西半、南米の全土未だ我に取りては殆ど新市場なり、……世界は日本を要し日本は世界を要す、全世界ならでは我は満足せざるべし。」としている。

次に転じて「地理学を学ばずして政治を談ずる勿れ、……地理学なしの政治論は……夢・空想・幻なればなり」といい、「……独の將軍モルトケ伯亦地理学の泰斗なり、……地理学上の観察に基せる彼の確信は実に摂理の指命に適中し、独逸民族は彼の教導の下にその辺疆をライン河の左岸にまで拡張するを得たり」なのである。「独の地理学者カール・リッテル曰く、『熱心と敬畏を以て国の地形を学ぶものは其未来の如何を推知し得べし』と、地理学の攻究豈に忽にするを得んや」と地理学と政治との関係を論じている。

地理学は彼によれば経済・政治にとって重要であるだけではない。「地理の

美術文芸に於けるは慈母の其子に於けるの関係なり、……詩人ゲーテが英国の詩歌に絶望的思想多きを其の地理学上並に気象学上の理由に帰せしは故なきにあらざるなり」なのである。

内村にとってもっとも重要なのはいうまでもなく宗教である。この宗教についても「誰か云ふ宗教には地理学の要なしと、誰か宗教歴史を読んで地理学の無用を認めし者ぞある、……煙霧蒼天を掩ひ非常に悵鬱たる英国に於て発達せる監督主義又は清教主義を山海美麗桜花爛漫たる我国に其儘輸入せんと努むるものは未だ地理学を学ばざる人なり」といっている。

結論として内村は地理学の目的を、「地理学に依りて吾人は健全なる世界観念を涵養すべきなり、国家のみが一個独立人たる社会にあらず、地球其物が『一個有機的独立人』なり、…我等は日本人たるのみならず又世界人 (Weltmann) たるべきなり」としている。そして「世界観念、博愛主義は自重愛国の念を減殺すると云ふものは如何なる愚者ぞ、もし其識の狭きを以て愛国と称するならば井底の蛙こそ最上の愛国者なれ、……真正の愛国心とは宇宙の為に国を愛するを言ふなり、……宇宙の為にす愛国心は世界大にして地球重なり、私の責任世界を包括して我は始めて私の重きを知るなり、宇宙学者ハムボルトの所謂『独逸に生れし世界の市民』こそ真正の独逸人にして真正の偉人なれ」と自己の立場を主張している。

第二章では地理と歴史との関係を、「地理と歴史とは舞台と劇曲との関係」とみている。そしてその内容は、「地形必ずしも国民歴史を左右せず、自由意志を有する人類は自然の奴隷にあらず、……吾人はバックル氏に倣うて英国歴史を自然的現象のみを以て解せんとせず、……是れ歴史と地理学とを混同するものにして両者の関係を論ずるものにあらず」として地理的決定論をしりぞける。そして内村は「一國の歴史は其地と其人との相互的動作 (interaction) の結果なり」とする。しかしながら自然の影響は大であり、「地形の歴史に及ぼす感化力」を山国・平原国・海国の分類によって論じていく。

山国についていえば、「山と自由との関係は歴史上最も著しきものなり、……瑞西国は歐洲自由の本源なり」がその例証である。そして「境界線として山

脈に二種あり、即ち東西に走るものと南北に走るものはなり、前者は国民を区分する上に非常の勢力を有し、後者は之に依って分界さるゝ国民を聯合せしむるに於て妨害たらざるが如し」が一般的法則であるとブーエー氏なるものの説に讃意を表している。それに山国の欠点は、「山は思想の起る処にして之を実行するところにあらず」なので「山に氣骨ありて度量なし、思想多くして実行少なし」ことである。

第三章は平原国と海国のことである。「平原は思想を実行するの場所」なので、「平原は世界争闘史の劇場」となる。それはまた「平原は国民富力の淵源」であるからでもある。平原もまた欠点をもっている。「山の特産は自由にして平原は圧制の巢窟」となることである。それにまた「国産の幅濶地にして国民の集合地なる平原は亦腐敗の依て以て起る処なり」でもある。その理由は「富の増加が国民の懦弱を招く」し「富は堆積すれば必ず腐敗する」ことにある。

海国の項では「進取と寛裕は海の産なり」であり、「独立の胸壁として海は山に垂ぐの価値」がある。しかし「海の重なる用は防禦にあらずして交通」にある。また「海の歴史は拡張の歴史」である。かくして「歴史は山に始まり平原を通過して海に終る、三者其一を缺いて国民の発達は健全なる能はず、人類歴史の多分は此地理学上、三原素の相互の關係なり、人を学ばんとするもの豈に地理を審かにせずして可ならんや。」として地理と歴史との關係を結論づけている。

第四章はいかにもキリスト者らしい題目である。ここでの主題は、「最も見易き推理法に則り、此地は意志なき偶然の作たるや」の検討である。そこで地球表面の五大洋と五大洲の散布をみて、「是れ偶然の符合とは見えざるなり」とする。そして「地の目的は如何、人類を発達せしむるにあり、地理の目的は歴史の目的なり」として、リトレー、ブンセン、ヘーゲル、シエリングの歴史観をあげ、「人類は地球廻轉の度数と共に完全に向ひ進みつつあることは極端なる厭世論者にあらざる限り識者の承認する所なり、而して人類の嘆息所たる地は此進歩啓發を助け促すものならざるべからず」と自己の見解を述べ、「余輩の觀察する所を以てすれば、地は人類の此発達を促さんが為に造られしもの

なり」としている。

第五章から第七章までは、亜米利加論の最後を、「ヒマラヤ山の西麓イラン高原の東端に始まりし文明は西漸するに従ひて発達し、西亜の理想は希臘に熟し、希臘の理想は欧州に於て実行せられ、欧の粹と理想とは米に於て結果せり、人類は亜に合同を計りて失敗し、欧に分離して、再び米に於て合せり、地理学の指摘する、心理学の預期する所、歴史の経過せし所、悉く相符合せざるはなし、自然其物は真理なり、自然に従ふものは天道に歩むものなり、地理学の教導実に天よりの声ならずや」と結んでいるところに内村の独特の文明西漸説が集約されている。

第八章の東洋論は印度と支那の考察である。それぞれ性格を異にしているが、「両者に東洋的の同一性」がある。それは「総括を求めて分解を避けし一点に於ては二者共に西洋文明の正反対の方向を取れり、綜合は東洋の特性なり、而して支那は政治的に綜合し、印度は靈智的に綜合せり」とみている。最後に世界の三大文明の特質をあげ、この欧羅巴文明、支那文明、印度文明の調和一致が人類の希望であるとしている。

さて「地人論」でもっとも重要なのは第九章である。ここでは始めに日本の位置、海岸線、山地の配列をみて、それを英国、希臘半島、歐羅巴大陸と比較したあと、「已に其位置を知り、其構造を究めたり、リツテル、ギョーの迹を踐みて謹慎静肅に地理学上の事実を歴史的に解せんには余輩亦我邦の宇宙に対する天職を探り得ざらんや」と問題をたてて日本国の天職を次の3点にあるとする。すなわち「一、日本は島国なり、而して島国の用は常に大陸間の交渉を助くるにあり、……日本国の位置は米、亜の間にあるにあり、其天職は是等両大陸を太平洋岸上に於て連鎖するにあらずして何ぞや」「二、……我の亜と米に対する位置は英の欧と米とに対する位置ならざるを得んや」「三、我が山脈の軸線南北するは我国に亜細亜の統一を施すに難からざらしめ、又之を横断するに東西脈の所々に存するは統一の下に欧羅巴的の自治独立の精神を養成し得せしむ、即ち我に亜欧両主義を同化するの特質ありと謂つべし」であり、したがって「日本国の天職如何、地理学は答へて曰く、彼女は東西両洋間の媒介者な

り」ということになる。しかもそれはたんなる空想ではなく「地理学の指定に係る我国の天職は大和民族二千年間の歴史が不識の中に徐々として尽しつゝありし天職ならずや」とみている。そして支那文明、印度思想の輸入、下つては提督ペルリの開港要求以来の欧米文明の吸収をみれば、すでに日記のところで引用したように「両洋我に於て合す、……二者の配合によりて胚胎せし新文明は、我より出でて東西西洋に普からんとす」と彼は考えるのである。

第十章はいわば附論である。「北三大陸の附属物と見て可なり」の「南三大陸が人類の進歩歴史における位置如何」がここでの問題である。個別的に各大陸を扱つたあと「然れども文明の西漸其極に達するときは其南漸の始まる時なり、南漸は已に始まりぬ、未来一千年間人類の冀望は南にあるべし」であるが、「吾人の義務は今の時にあり」であるので、「今、此の時と所に処して、能く吾人の天職を尽す」ことが重要であるという。

III

以上かなりながながと「地人論」の内容を紹介してきたが、それでは「地人論」を日本の地理学史とか日本における地理学の系譜という視点からはどのように位置づけたらよいであろうか。

そのためには一応明治初年以來の日本の地理学はどのような状態にあったかを見ておく必要がある。石田竜次郎教授は日本の地理学の系譜をいくつかの潮流に分類しているが、それによれば当時の地理学としては、⁽⁷⁾風土記系統のものとして皇国地誌があり、それは「統治者ないし支配者の立場から書かれた地理学」である。学校地理系統としては「明治10年前後に各地の師範学校編の県の地理書」があり、「学校地理として、戦前まで固定した」のはこれであり、「平板な記述にのみ終始することに、その特徴がある」のである。また宇宙科学系統のものが「明治10年代の文部省の百科辞典の翻訳等もあずかっているし、当時の大学における外国人教師を通じて入ってきた」もので、「ドイツ流

(7) 石田竜次郎著地理学の社会科古今書院1958年 pp.76~79

のエルドクンデ」であった。その特色は「社会も宇宙の自然現象と同じく、与えられたもの、自然と並列的なものとして扱うので、それがいかなる意味をもつかということとは全然考えない」のである。何れにしても当時はまた地理学は未発達であり、地理学といっても社会科学的な扱いにはほど遠い状態にあったといえよう。

いっぽう赤峰倫弁氏はこのあたりの事情を次のようにみている。⁽⁸⁾すなわち幕藩体制下の洋学輸入による自然科学、世界知識は為政者によって嚴重に取締られていたが、明治維新とともにヨーロッパ思潮が急激に流入し、ここに世はあげて文明開化の時代をむかえるのである。このとき新社会が如何なる方向に進むべきかを教えたのが世界地誌の翻訳刊行とその流布である。福沢諭吉の「西洋事情」(1867年)がものすごい売れ行きをみせたのもこうした事情によるのである。ほかにもこのように文明開化の先駆的役割をになっていくつかの外国地誌もしくは見聞記が明治初年にあらわれている。しかし急速な資本主義化の途をいそぐ日本にとっては、より実用的な経済学、法律学の方がその指導的役割を果すべく要求され、地理学の役割は眼前に展開する急激な環境の変化をいかにして合理的に説明し、理解せしめ、それに応じさせることになってくる。モンテスキュウの「法の精神」がいち早く抄訳されているのもそうした事情による。しかし「日本への輸入環境論は未だ学的体系をもち得ず、国内のめまぐるしき資本主義的整備、環境の急テンポな変化に対して極めて素朴に且つ常識的にしか把握し得なかった。」程度のものであった。だが明治も20年代になると「近代市民階級の歴史観は最も新鋭なものとして新興日本の思想界に登場した」のである。三宅米吉著「日本史学提要」(1886年)は環境を封建的権威に代るものとして画いているし、矢津昌永の「日本帝国政治地理」(1893年)は「地理的形狀ノ人類全般ニ対スル關係、即チ人類ノ政治上ニハ如何ニ風土的關係アルヤ、人類ノ社会上ニハ如何ニ地理的現象ノ影響アルヤ、……」の問題を提起してその答えとして「……則チ此特異ナル各部ノ形状コソ各国史乘ニ現ハ

(8) 赤峰倫介日本に於ける環境論の成立 駒沢大学歴史地理学会誌第三号1938年

ル、特異ノ変遷発達ヲ来シタル要素ナリ」であるし、「天然、地形風土ハ人類社会ノ有形的物事ニ影響變化ヲ与フルノミナラズ、又人間心情ノ無形的感化ヲ及ボスナリ」としている。要するに赤峰氏は反封建イデオロギーとしての地理的環境論の日本への導入という視点から上のようにみているのである。

さて「地人論」は明治20年代の後半に登場する。前記2人の「地人論」への評価はどうか。石田教授は前述の概説の中で「人文学・環境論学派」という分類をして、「このようなりッターやラツツエルの学説は、明治時代では内村鑑三の地人論、志賀重昂の諸種の著作に見え、大学ではエルドクンデが理科系に入ったのに対し文科系に根を下した。」と書いている。赤峰氏も、「前記のごとき日本の新しき秩序への発展の裡に輸入され、確立していった近代地理的環境論は、明治三十年、日本における産業資本の確立以後、彼の内村鑑三、志賀重昂二氏において最も革命的に展開せられたと見ることができよう。」としていて、両者の評価は環境論の代表者としてみることににおいて一致している。

さて石田教授のはあまり立ち入って論じたものではないが、赤峰氏の論文は内村、志賀の評価がその主題をなしているので、氏の評価の内容をややくわしくみしてみる。氏によれば、「すでに三宅米吉並びに矢津昌永によって主張された歴史性の原理は、地形風土の直接的規定による個別特殊性に存した。その自然的諸条件の直接的規定性に対して人間意志の存在を主張し、歴史における契機を『人なる活動物と地なる不動物の相互的動作』として把束した内村鑑三の主張はまさに前者の見解を修正することによって前進発展せしめるものであった。」とみている。しかし「彼の地理的主張は、人間意志の存在を認めて相互作用論への前進を示したにもかかわらず、彼の主張する『人間意志』の内容はただ単に『進歩啓発』の意を含むもの」であって漠然と『完全』に向うものであると理解され、『地はそれを助けるもの』という抽象的な概念によって満足している。」と内村の批判もしている。赤峰氏は続いて志賀重昂を論じて、彼は「社会的歴史的発展の契機が地理的諸条件と民族的、人種的条件に存する」としているが、「彼の論ずる民族論乃至人種論が極めて素朴な科学性に乏しい俗論である」こと、しかし内村の場合の「人間意志」は志賀の「民族乃至人種

」であったこと、この両者は「ともに自然と人間社会を相互作用の関係において認め、それらの同時規定の上に歴史的発展の原理を構築する一発展形態である」として内村と志賀との同質性を主張している。

ところで私がここで問題として取り上げたいと思うことは、石田教授、赤峰氏ともに「地人論」を環境論という視点から考察されているが、その内容になると必ずしも一致していないのではないと思われることである。石田教授はかんたんにふれられておるだけなので真意はつかみかねるが、前述のようにリッターやラッツェルの学説の日本での反映とみている。これに対して赤峰氏の方は地理学説史との結びつきは明らかでない。氏が「近代地理的環境論」という内容は、「中世神秘的な自然観、分散不統一な権威的人間生活と自然との関係によって環境を捉え説明してきた彼の封建的イデオロギーを打ち倒し、歴史の進展のために非常に進歩的な役割を果たした」ものである。こうだとすればそれはかのモンテスキューがしばしば引き合いに出される社会思想としての地理的決定論である。したがって一口に環境論といっても、歴史とともに古くからある素朴な宿命論的なもの、一定の歴史的段階にでてくる社会思想としての地理的決定論、ラッツェルに代表される近代地理学としての地理的決定論ではそれぞれに問題の領域がちがっているのである。地理学史としてみるならば不用意に社会思想としての地理的決定論を持ち出すべきではないと私は考える。⁽⁹⁾

われわれは環境論もしくは地理的決定論との関係で問題をたてるよりも、個々の内容それ自体を学史的に検討することの方がよいのではなからうか。⁽¹⁰⁾「地人論」を評価するのでもう少しちがった角度から見られないであろうかというのが私の問題なのである。Ⅱ、においてながながと内容を紹介したのもその意味なのである。この紹介が必ずしも内村の真実をとらえてないかも知れないが、それにしてもこの紹介でもわかるように、「地人論」全体を通じて感じら

(9) 飯塚浩二人文地理学説史1949年p.38. その点、石田教授の説はあいまいである。

(10) 第二次大戦後の現在でも、地理学の役割は地理的決定論の打破にあるとの説が有力であるが、私はそれは非生産的であると考えている。

れるのは環境論もしくは地理的決定論の代表というよりも、むしろ全篇をつらぬく目的論的見解ではないだろうか。そしてそれは彼が熱烈なるキリスト者であったという特殊な理由によるのであろうか。なるほど第四章の題名はたしかにキリスト者でなくてはでてこないだろう。しかし「地人論」の最大のポイントである「日本国の天職」にみなぎっている迫力は、彼がキリスト者であったからというよりも、もっと一般的な立場からの精神の産物ではなからうか。

さて一般には目的論的見解は科学とは対立するものであり、科学はこの目的論からの脱却ないしは解放によって成立するものである。地理学ももちろん例外ではない。地理学説史においてラッツェルが地理的決定論の代表者として扱われるときは、その地理的決定論はまさに目的論とは無縁なのである。だから先ほどのべたように、環境論もしくは地理的決定論とただだけでは問題が混乱するだけになるのである。そうだとすれば「地人論」は科学としての地理学としては扱えないのではないか。「地人論」が国民に大きな影響を与えたが専門的な地理学にみるべき影響を与えなかったのは、一つにはそれがいわゆる学問としての地理学の書物であるとは受けとられなかったからではなからうか。⁽¹¹⁾⁽¹²⁾

内村自身はどう思っていたのだろうか。すでに引用したように「地人論」は「米国アマストに於ける地歴研究二年間の成果」であり、それは「先哲アーノルド・ギョー氏の箸書に倣ひ」書いたのである。このギョー氏は「米国プリンストン大学の地理学教授たりし故アルノルド・ギョー氏は有名なるカール・リッテルの崇拜家」⁽¹³⁾であった。そして内村はリッテル、ギョーにしたがって日本国の天職を考察しているのである。また参考書としてあげているのをみるとギョー、リッテル、ペシエル、ソマビル夫人、マーシュの地理学者のほかにはローリンソン、ハーゲル、ダーウィン、レクルースの名前があげられている。しかし内村が自分ではもっとも影響を受けたと思っているのは、リッテル、ギョー

(11) 入江敏夫編現代の地理学広文社1963年p. 23

(12) 当時のこの方面の専門誌である「地学雑誌」には志賀の「日本風景論」は問題にされているが、「地人論」は私の見た限りではとりあげられていない。

(13) 「地人論」pp. 24~25

である。「地人論」の原型である「日本国の天職」（1892年、六合雑誌）では「有名なる独乙の地理学者にして『エルドクンダ』（地学）の著述者として近世哲学地理の始祖と称せらる、カール・リッテルは創めて説を建て、曰く『思慮あるの政治家にして若し其国の地理学上の性質を沈思考究する時は其国の為し得べき事業並に達し得べき発達の程度の多分を預知するを得べし』と、氏の弟子にして瑞西国の学者アルノルド・ギョー氏は此説を尙一層拡張し」とある。したがって「地人論」の地理学的意義を確定するためにはカール・リッターのことにふれないわけにはいかない。

近代地理学の先駆者リッターの見解の著しい特徴は、「人間と自然との相互関係についての目的論的見解であって、リッターは地球を『神の意図によって人類の諸々の必要に完全に適合するように作成されたところの一つの有機体である』と解した。」のであり、その点において多くの反対者から非科学的ときめつけられている。しかしだからといってリッターの業績を科学以前としてしまうことは学説史としての正当な取り扱いではないことは飯塚教授のいう通りである。

ここまでくれば「地人論」もその目的論的見解の故だけで科学以前としてしまうことに多少の問題が残らざるをえない。しかしこの問題はどこまでどのような点で分析を進めていくかはそう容易ではない。むしろ必要なことはこれまでの追求で明らかになったように、「地人論」の地理学における位置づけは、古来からの宿命論的な環境論でもなく、また地理学史の中でのラッツェルの地理的決定論に対応するのでもなく、カール・リッターとの関係で論じられなければならないことである。

ところでこれまでみてきたところからすれば、赤峰氏の問題のたてかたは見当外れであるのだろうか。いやそうではあるまい。学史を論ずる場合、それぞれの業績を支えている思想がいかなるものであるかはもとより当然のことであるし、近代日本のすぐれた思想家である内村鑑三であれば、「地人論」が彼の業績の中でいかなる位置を占めるか、また時代思潮との関係はどうかの問題になることもあたりまえのことである。

内村が「地人論」を書いたのは日清戦争の前年の1893年（明治26年）で、こ

の年は内村の文筆活動のもっとも多産であった年であり、「求安録」「余は如何にして基督信者となりし乎」も書かれている。⁽¹⁴⁾そしてこの著者33才の作品は、「代表的日本人」、「興国史談」と並んで初期の三部作をなしており、しかもその中心がこの「地人論」である。⁽¹⁵⁾

「地人論」は内村の生涯にわたる全思想である日本の使命の追求で、かなめの位置を占めているのである。⁽¹⁶⁾たしかに内村の全生涯はイエスと日本を愛したことにささげられている。そして内村の思想史的意義については多くの考察がなされているが、私はⅡ、で引用した「地人論」の内容のかぎり強く心を打たれるのは、日本の使命に対する強烈な期待と、そして日本人が同時に世界人たらしんとする考えである。内村が近代を代表していることはここにあらわれている。日清戦争に日本の天職を見出したが、その誤ちを悟ってからは最後まで非戦論者でありえたこと、重農主義者として労働をたたえたこと、キリスト者となるのがまさに近代でありえたこと、⁽¹⁷⁾こうした内村は、「確かに明治精神の最も健康な姿であり、それは近代日本の青春期のシュトルム・ウント・ドランクの中からのみ生れえたものであった。」⁽¹⁸⁾といえる。

以上のようにみれば、「地人論」はたしかに近代思想としてあらわれたのであり、普通の意味での地理学の書であるよりは、やはり時代思潮の代表作である。地理的環境論というような言葉で分類されるよりも、内村自身がいうように「世界の地理を一大詩篇として見たる作である」であり「余の一大思想を世に供せし」ものとみる方がよりたんにきに内容を表すであろう。

IV

「地人論」は当時の日本の専門的地理学にはたいして影響を与えていない。そして今までみてきたように「地人論」は地理学の書物であるとはいい難

(14) 岩波文庫版の解説

(15) 田畑忍 内村鑑三に於ける平和主義思想の展開 思想1953年第11号pp.26~27

(16) 同 p.35

(17) 近代日本思想史第二巻青木書店 1956年pp.335~341

(18) 遠山茂樹内村鑑三に心うたれる理由 回想の内村鑑三

い。しかしいっぽう日本の地理学の状態はどんなようであったかはすでに少しその様子を見たが、ここでまた石田教授の解説を利用すると、明治末年以来高師風地誌型が教育界を支配した。また日本の大学で地理学の専門の学生が養成されるようになるのは京都が1910年、東京が1919年からである。しかしこうした高等教育機関、研究機関における地理学は、エルドクンデでなければ人文学流のものであり、社会科学的思考が入るのは大正末期からである。何れにしても日本の地理学は、教育の手段の一部として始めからイデオロギー抜き、無味乾燥な物産知識として作られたし、研究機関でも時代思想とは無関係の形で研究が進められてきたとみてよからう。したがって「地人論」は地理学の書とは思われなかったであろうし、その思想も受け入れられなかったのだろうと私は考える。そしてこのことは日本の地理学にとっては不幸なことであったと思う。地理学が現状を学問の対象にするだけに、学問を支える思想についてかありあうことの困難なことはたしかである。しかしそれにしても地理学と時代思想との関係について無関心でありうる地理学者が今なおかなり多いのである。

附記 この貧しい小文をつつしんで故岡田貫一教授の御霊前にささげる。

(19) 前掲地理学の社会科pp. 79~82